

ひと夏の約束

森野 水琴

翌年の八月第一金曜日の夜。女は昨年と同じホテルのバーのカウンターでカクテルを飲んでいる。バーのオリジナル夏限定カクテルで「ひと夏」と名付けられている。

昨年の夏、一週間を共に過ごした後、きょうの二十一時の再会を約束した。夕食を共にすれば良かったのかもしれないが、昨年の出会いを懐かしむように、このバーで待ち合わせることにした。

「ひと夏」と注文したので、バーの店員は思い出したようだ。「一年ぶりのご来店ありがとうございます」と微笑む。

二十一時になった。
男が来ない。

そわそわする女とは裏腹にバーの店員は落ち着き払っている。たまりかねて店員に聞こうとすると「いらつしやいませ」と店員は客を迎える。

「少し遅れたね。失敬した」と男がカウンターに来た。

一分少々遅れたのだが、女にはとてつもない長い時間に感じた。

「こちらのテーブルにどうぞ」と店員がふたりに促す。

一年ぶりの再会を果たし、昨年同様、一週間の夏の夜が始まる。

翌週の土曜日の夜に女がバーに来た。荷物を持っているから、どうやら今夜で帰るらしい。

「二年にわたりお世話になりました。来年は待ち合わせないことになりました」と女が言う。男と付き合うことになったとのこと。

「それはおめでとうございます」とバーの店員は言いながら、例のカクテル「ひと夏」を女に出す。男から連絡があり、女が立ち寄ったら出すように言われたとのこと。

格別のカクテルを飲み干し、笑顔で女はホテルを後にした。